戦後81年

大阪戦没者追悼式

と　き：令和８年７月29日（水）
　　午前11時30分開式
ところ：大阪市立男女共同参画センター 中央館　クレオ大阪中央

式　次　第

開　式　の　こ　と　ば

国　歌　斉　唱

黙　と　う

式　辞

来賓追悼のことば

遺族代表追悼のことば

献　花

平　和　へ　の　誓　い

閉　式　の　こ　と　ば

（主催）大阪府・大阪市・堺市

次世代継承の取り組み

再び戦争の惨禍が繰り返されることのないよう、その教訓を次世代に語り継ぎ、恒久平和への誓いを新たにするため、小中学生を対象として「平和の大切さを次世代に継承する取組」を令和８年６月に実施しました。

当日は、「堺市立平和と人権資料館」を見学いただいた後、昨年度記録した戦没者遺族等の方（語り部）の戦争体験談を視聴いただきました。

戦時下の暮らしや被害の実相について理解を深め、実際の体験等に基づく語り部動画を視聴することで、戦争の悲惨さや平和の尊さについての認識を一層深め、それぞれが感じた思いや学びをもとに、平和について考える機会となりました。

戦争体験談

※無断複写・転載・加工等禁止

西嶌　美八子　様



私が生後２ヶ月の時、父は志願して戦地へ向かいました。

残された母との生活は厳しく、食料不足の中、母は着物と食料を交換するため田舎へ通い、古い浴衣でおむつを作るなど苦労を重ねました。灯火管制下では、わずかな明かりで生活していました。

父は出征から３ヶ月後の昭和 19 年（1944 年）７月、サイパン島で戦死しました。幼い頃、母と叔父に連れられて受け取った遺骨箱には遺骨はなく、父の名前を書いた紙が入っているだけでした。母はその時、涙も出なかったと語っていました。

戦後は父のいないことでいじめを受けることもあり、生活は困窮していました。母が古着を直した服や下駄で学校へ通い、遠足や修学旅行にも参加できませんでした。病弱な母を支えるため、中学卒業後すぐに働き始めました。

母は父に説得されて結婚しましたが、共に過ごしたのは約２年でした。父を伝える品は一枚の写真だけで、今も海軍の帽子をかぶった父の写真を大切にしています。

戦争は若い世代から平穏な日常を奪い、個人の願いを踏みにじります。二度とそのような時代をつくらないため、この国が平和であり続けることを心から願っています。

峯野　繁信　様



父が赤紙で戦地へ送られると、母は父の無事を祈り、毎日 4～5km 離れた神社へ通いました。食糧は国に供出され、残った芋の根まで食べるほどの食糧難でしたが、村に駐留する兵隊から羊羹をもらうこともありました。

当時は国家への奉仕が優先され、学校では教育勅語の暗記が強制されるなど、戦争が生活の隅々まで影響していました。終戦後、人々は戦争に関する書類を燃やすなど、その痕跡を消そうとしました。

最も恐ろしかったのは空襲です。警報が鳴ると町は真っ暗になり、裏山からは焼夷弾で赤く染まる神戸の空が見えました。その後、堺も空襲を受け、市街地のほとんどが焼失しました。

約 9 年の従軍を終えた父は終戦直前に帰還しましたが、長く離れていたため他人のように感じました。敗戦を知ったのは終戦から数日後で、安堵と将来への不安が入り混じる複雑な心境でした。

戦争を経験した者として願うのは平和です。「平和」と「自由」を取り違えることなく、その意味を正しく考え、この国が二度と戦争への道を選ばないよう願っています。

平和への誓い

※無断複写・転載・加工等禁止。
※掲載にあたり一部抜粋しています。

堺市　小学６年生　丸谷　岳睦（まるたに　たけちか）さん

ぼくは、98 歳のひいおばあちゃんから戦時中の話を聴きました。その話を聴き、お腹いっぱいご飯を食べ、家族そろって眠れる今の生活は、多くの方々の平和への努力によって作られてきたのだと気づきました。この平和への努力を、ぼくたちの世代も続けていきたいと思いました。知らない人であっても、その人の事情に耳を傾け、お互いを理解しようとする積み重ねが平和につながると信じています。戦争の苦しみを知る方々の思いを受け継ぎ、平和な世界を目指し続けたいです。

八尾市　中学３年生　辰巳　紗季（たつみ　さき）さん

戦争で、生きたくても生きられなかった人たちを思うと、家族や友達と過ごす毎日が、どれほど大切かを感じます。私は平和学習をきっかけに、戦争についてもっと知りたいと思い、堺市の戦争体験を語り伝える活動に参加しています。お話を聞き、戦争の残酷さと人々の苦しみを知りました。戦争は尊い命を奪います。絶対にしてはいけません。戦争の悲しみや苦しみを想像することが、平和への第一歩だと思います。私は今ある命を大切にし、希望をもって生きていきたいです。思いやりや相手を理解しようとする気持ちが、平和を支える力になると思います。平和を願い続けることは、未来をつくる私たち一人ひとりの大切な役割です。その思いを胸に、自分にできることを考え、行動していきたいと思います。

堺市　中学２年生　井上　晴登（いのうえ　はると）さん

私の曾祖父は、太平洋戦争で徴兵され、「インパール作戦」という過酷な戦地へ送られました。多くの人が命を落とす中、奇跡的に生きて帰ってきました。戦後、曾祖父は「戦友たちの屍を道すがらに置いてきた」と語っていたそうです。次々と倒れていく仲間を残し、自らも死を覚悟しながら進むしかなかった苦しみは、私には想像もできません。また、「自分の墓はいらない。戦友たちを置いてきた自分だけが墓に入ることはできない」と繰り返し語っていたそうです。曾祖父は八十四歳で亡くなりましたが、その遺志によりお墓は建てられず、お寺に納骨されました。曾祖父が生涯忘れることのなかった戦友たちへの思いを忘れずにいることが、私にできる平和への一歩だと信じています。

平和を願うメッセージ

伝えたい　戦争のおそろしさ　平和のすばらしさ
守りたい　子どもたちの未来　日々の幸せ　みんなの笑顔
考えたい　今までのこと　戦争のこと
　　これからのこと　日本のこと、世界のこと、地球のこと

（平成 27 年度　沖縄「なにわの塔」慰霊追悼式・世代間交流平和学習事業参加児童・生徒一同）

平成 27 年４月（戦後 70 年）に実施した沖縄「なにわの塔」慰霊追悼式・世代間交流平和学習事業に参加した児童生徒の皆さんが、平成 27 年８月開催の「戦後 70 年平和祈念・大阪戦没者追悼式」で披露するため共同作成したものです。

戦没者遺族等の方（語り部）の戦争体験談については、
「大阪戦没者追悼式」公式YouTubeチャンネルで動画をご覧いただけます。